



## 「イースターの疑い!？」

評議員 松本 義宣(東京教会牧師)

復活祭に、古から教会に伝わる有名な言葉があります。それは「復活祭の疑い!」。「疑い」と聞くと、「やっぱりネ。いくら教会の信仰深い人でも、イエス様の復活なんて信じがたい、昔からやはり『疑い』があったのか」と、早合点する人は思い、現代人の常識として当然と納得もするかもしれませんが、そうではありません。実は正反対なのです。「復活祭の疑い」というのは、イエス様の復活を疑うのではなく、死の支配、死の力を疑うという意味です。人は誰でも確実に死ぬ。しかもそれで終わり、死の力は何人にも動かし得ない冷酷な事実であり、不安と恐怖を誰もが抱くもの、そう信じられています。しかし、イエス・キリストの復活の出来事を聞き、それを知る者は、そういう死の事実を疑い始める。もしかすると、死というのは、そんなに確かなものではなく、絶対なものではないのではないか。「死は絶対」、しかし本当にそうなのだろうか。私たちに「絶対」というのは、それこそ「絶対がない」。このことが、イエス様の復活を祝う復活祭において、私たちが初めて抱き学び始める真の「疑い」である、そういう意味なのです。

つまり、人間がかつて一度も疑うことなく、確実にだと思っていた死、しかし、それ

が疑わしいものになる、不確実なものだと、イエス様の復活・イースターは告げるのです。そして、一度この「復活祭の疑い」に取りつかれると、私たちにはずべてのことが変わって見え始めるのです。そして私は、それが私たちの「信仰」と呼ばれるものに他ならないと思うのです。信仰とは固く信じ込むことだと、普通は考えられています。復活を信じることも、確かにそう思われていますが、本当は、主イエス様の復活によって、私たちが確実だと考えていた「死の現実」が疑わしくなること、この逆転がとても大切なのではないかと思うのです。死人が甦る、蘇生するということは納得しがたいし、それを丸ごと飲み込んで復活を信じる! などとは、聖書は強制しません。むしろ、「死がすべての終り」、絶望でしかないという現実を揺がせていく、その事実を疑い始めさせられ、本当は別の真実があるのかもしれないと変えられて行く、そんな「疑い」によって、新しい真実に目を向けるようにされるのが信仰です。たぶん「私の絶対なんて絶対ない」、神さまの絶対しかない、その転換が私たちに起こるのがイースターです。あなたは、少し「疑い」を抱くようになりましたか?

イースター、おめでとうございます。

## 「復活祭の季節に。」

評議員・後援会長 徳野昌博

今、私たちは、いや世界中の人たちは、目に見えない新型コロナウイルスに翻弄され、不安に包まれています。マスクをする人の顔から、表情を見て取るのはむずかしく、目に映るすべてのものがよどんで見えます。いつ終わるとも知れないウイルス禍のために、人々は疲れ、すっかり様変わりした感のする日常の風景です。改めて、人生には予想もしていなかったことがいろいろ起って来るものだと実感しています。とはいえ、ウイルスとの戦いは、人類の歴史と共に、延々と続けられてきたものなのですが…。

とにかく私たちは右往左往しています。そんな私たちのところにイエス様が来てくださり、語り掛けてくださいます。これが、「るうてるホーム」創立以来、大切にしてきた「礼拝」の場であり、時です。その礼拝を通して、私たちは繰り返し、自分が本当に願っており、必要としているのは、救い主と出会うこと、その方を信じて生きることなのだと気づかされていきます。

ゼーレン・キェルケゴールは、その著、『死に至る病』の序文の中で、ラザロの復活の出来事について次のように語っています。「キリストが墓へ歩み寄って、声高く『ラザロ、出てきなさい』（ヨハネ福音書11章43節）と呼ばれるとき、この病が死に至るものでないことは、もちろん確かなことである。しかし、たとえキリストがそのことばを口にされなかったとしても『復活であり、命』（同11章25節）であるキリストが墓に歩み寄られるというそのことだけ

で、この病が死に至らないことを意味してはいはしないであろうか。キリストが現にそこにいますということがこの病が死に至らないことを意味してはいはしないであろうか！」と…。イエス様がもし、ここでラザロを甦らせなくても、「復活であり、命である」主が、私たちの死の直中に来られたことにおいて、真の意味で死が克服されていると、キェルケゴールは言うのです。本当に、その通りだと思うのです。

復活であり、命であるイエス様が、礼拝において、私たち一人ひとりと共にいてくださいます。それゆえに、この世で、そして、わが身に起こるすべてのことは、もはや「死に至る病」、致命傷にあらず、です。

私たちは、度々、愛する者の死を経験し悲しみに打ちのめされてきました。また、自らの死を思う時、心を騒がせ、不安に駆られます。でも、イエス様が十字架で死に、復活されたゆえに、私たちには死の力に対する勝利が与えられています。つまり、父なる神様は常に共にいてくださり、死を超えて復活の命に生きる者とされています。希望と勇気をもって、手を携え、共に平安のうちに歩みましょう。



## 「第三者評価を受審して」

特養事業部主任 三木 勝利

2019年12月19日、20日の2日間、特養事業部にて第三者評価が行われました。

2015年に移転してきてから、これまでにケアハウス事業部、通所事業部にて行われてきましたが、2019年度の事業計画に基づき、客観的に課題を整理することを目的に特養事業部でも受審することとなりました。

7月から調査員の方とスケジュールについて話し合わせ、それまでに揃えておく項目や書類、日程調整など様々な工程を確認しました。普段の業務がお客様やご家族の希望にどこまで沿うことができているか、私たちが大切にしている「るうてるケア」がどこまで第三者の評価につながるのか、不安もありましたが、「私たちの今の評価を知る」ことの期待のほうが大きかったです。

施設長代理と主任で進め方を検討し、主任、ユニットリーダー、各スタッフへ申し送りを行い、特養全体で取り組むことを決めていきました。評価項目に沿って各主任、各リーダーが現場スタッフと相談しながら、できていること、できていないこと、またその理由を各々で整理していきました。そして、主任も交えたユニットリーダー会議で整理された内容を共有しながら、私たちが普段どこまでできているかを自分たちで評価しつつ、その中でも課題を見つけていくことができました。

第三者評価を終え、総評に目を通した時に、普段意識していなかったことが、実はとても大切なことであることに改めて気付くことができました。

【特に評価の高い点】として以下の内容が記されていました。

「創業者のところが法人の理念として50有余年の間脈々と受け継がれて今に至っている。入居者一人ひとりを大切にし、誠実に仕えるところを学び、個別ケアの実践に生かしている…。」

第三者評価を受ける前は、「現在」の私たちのケアを中心に考えていましたが、実はそこには、「これまで」の諸先輩方の働きがあったからこそ。私たちが大切にしている「るうてるケア」は数十年の間、諸先輩から引き継いできたものであり、自分一人で築き上げてきたものではないことに改めて気付くことができました。

また課題についてもたくさん指摘いただきました。ご家族からも厳しい意見をいただくこともできました。これからは、私たちがその課題に向かって知恵を出し合い、良いところは残しつつ、形を変え、次の人たちにも伝えていけるように頑張っていきます。



